

1. 研究の目的

大学ボランティアセンターがおこなう「ボランティア学習プログラム」について、プログラムの実施が学生や大学、地域社会に及ぼすアウトカム（結果）、インパクト（短期的・長期的）について、プログラム評価（P.H.Rossiが開発）手法を用いて明らかにする。

2. 研究の内容

研究申請者が所属する大学ボランティアセンターが地域の社会福祉協議会と協働して開発した「とつかプロジェクト」（ボランティア学習プログラム）に関して、学生や大学、地域社会に及ぼす効果や影響の評価に関する学習会の（第3回、第4回）を開催する。第1回～第2回（2010年9月）の学習会では、「とつかプロジェクト」の実施が学生、大学、地域社会に与える結果（アウトカム）や短期的・長期的な影響（インパクト）を洗い出すワークショップ（1回目は東京学芸大学福井里江先生が講師）をおこなった。

本研究は評価の枠組みを検討する勉強会（第3回）、及びロジックモデルを検証する講義+ワークショップ（第4回）を実施した。

■第3回の内容

プログラム企画者及び参加学生で取り組んだ「とつかプロジェクト」の結果や成果を確認するワークショップをもとに、評価の枠組みを検討した。その結果、今後はプログラム評価理論のうち、プロセス評価理論に着目して「とつかプロジェクト」でねらいとしたことが、プログラムのなかで有機的に結びついているか、ロジックの検証をしていくこととした。講師（東京学芸大学福井里江先生）にはこれまでのワークショップの整理と評価、今後の進め方としての「プロセス評価理論」のご提案をいただいた。

■第4回の内容

第3回の勉強会を踏まえて、講師（東京学芸大学福井里江先生）によるプロセス評価理論の講義ののちに、参加者が「とつかプロジェクト」の事例をもとに、プロジェクトでおこなう「活動」とプロジェクトが期待している活動の結果や成果とが論理的に結びついているかの確認をおこなうワークショップをおこなった。

ワークショップを通して「とつかプロジェクト」の実施において、地域が何を期待しているかが不明瞭であること、その結果としてプロジェクトが地域社会にもたらす成果も十分に明らかにされていないなどの実践上の課題が浮き彫りになった。

こうしたワークや議論のなかで、評価とは結果だけに目を向けるだけでなく「形成的評価」の観点で、プロジェクトを常に精緻化していく営みであることが再確認された。

3. 研究会の成果と課題

平成22年度に実施した「とつかプロジェクト」について、企画者及び参加者が参加するワークショップにて、プロジェクトの結果と成果を確認し、今後さらにプログラムを精緻化していくために、プロジェクトのプロセスについての着目し、ロジックモデルの検証に取り組んだ、その結果、上述したように「プロジェクトが地域社会にもたらす成果も十分に明らかにされていない」という課題が明らかにされことによりプロジェクトに関わる地域関係者にヒアリングシートを配布して、地域側のニーズを明らかにする作業をおこなうこととなった。参加者にとっては、プログラムの実施に留まらず、それを「評価」し、どのように精緻化していくかについて、実践を通して体験的に理解できていることは意義深い。本研究会参加者による意見交換の席では、研究会での学びや問題意識をもとに、他大学においてもプログラムの評価に取り組むようになったとの報告があり、本研究会が「とつかプロジェクト」に留まらず、広く大学ボランティアセンターのなかでおこなう有効な手法として認知、評価されてきていることが確認できた。今後はより多くの関係者とともに議論をしていくこと（研究会を公開として研究成果を共有して、課題を確かめる）、また評価報告書を作成して、評価の意義やプロセス、結果を客観的に示すことが課題と考える。公開型の研究会は、9月に開催する方向で調整を進めており、その場でこれまでに研究成果を報告し、さらに研究を発展させる計画で進めている。